

日本エコレザー、6つの条件

- ①天然皮革である
- ②発がん性染料を使用していない
- ③有害化学物質の検査をしている
(ホルムアルデヒド、重金属、PCP、禁止アゾ染料)
- ④臭気が基準値以下
- ⑤適切に管理された工場で作られた革
(排水、廃棄物が適正に管理された工場で製造)
- ⑥染色摩擦堅ろう度が基準値以上



<http://japan-ecoleather.jp>

高橋 和義氏

(宮城興業株式会社 代表取締役)

吉村 圭司氏

(NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

稲次 俊敬氏

(NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

個のニーズに応える「和創良靴」は、
ハイクオリティな、世界で戦える靴です。

軍靴からスタートし、
グッドイヤー靴の下請けに

吉村 今月号のエコレザー座談会には、山形県南陽市にある紳士靴メーカー・宮城興業株式会社の高橋和義社長にご登場いただきました。工場は山形新幹線の赤湯駅が最寄り駅となる場所にあり、周辺には田畑やぶどう畑、民家などが広がるのどかな場所です。
会社は山形にありながら、社名では「宮城」となっています。まず、社歴からお話しいただけますか。

高橋 会社は1941年創業で、今年で77年になります。私は4代目です。もともとは宮城県仙台市にあつたのでこの社名となっています。当時は、戦時中でしたので45年までは軍靴を作っていました。



山形県南陽市の本社工場の前で

私の祖父が代表をされていました。疎開時に持ってきた物資も残っており、戦後数年たってから、それらを国から買い上げ、民間の靴を作り始めました。

吉村 民間の靴とは、どのようなものなのでしょうか？

高橋 当初は自社ブランドで紳士靴を作っていました。それが昭和30年代になると、体制を大手メーカーから発注をもらう下請け生産に切り替えました。初期のグッドイヤーウエルトの機械を一式そろえて、量産を始めたものごときからです。当時ブームだっ

終戦の年の6月に空襲に遭い、焼け残った機械と物資を持って山形に疎開してきました。しかし終戦となり、軍靴を作る必要はなくなりました。
当時の会社は組合的なもので、



吉村氏



高橋氏

たボーリングシューズも5年ほど手掛けました。

その後に来たのがVYブームでした。ここから日本製靴様(現リーガルコーポレーション)の下請けが20年ほど続きました。またまった発注が突然途絶えたのは、当社が50周年を迎え、会社の業績も過去最高のバブル期でした。経営危機を乗り越えるために、これまで2回、リストラを余儀なくされました。その内の1回は、私が社長に就任した当日でした。

コンフォートシューズの登場で、靴づくりの方向性が変わった

吉村 その後の社歴の中で、大きな出来事がありましたか？

高橋 80年代後半からドイツからコンフォートシューズが入って来たことです。

正直なところ、「コンフォートシューズとはなんぞや」ということがかかりました。当社流の履きやすい靴として最初に発表したのは「ベーシック35」でした。

これは7サイズ×5ウイズで展

開する紳士のグッドイヤー靴で、これだけのバリエーションがあれば、多くの人の足にぴったり合う、これぞコンフォートシューズだ！として発表しました。

吉村 反応はいかがでしたか？

高橋 お客様には大変喜んでいただけました。また、百貨店で1カ月ほど販売したときも、「こういう靴を待っていた」と言われ、大変良く売れました。しかし、残念ながらお客様の反応とは裏腹に結果は在庫の山になりました。売場で35通りのサイズは抱えきれないということとです。

次に97年に開発したのが、売場で調整が可能なインソールを装着



若い人が多く働く工場

した「STリラックス」でした。これは靴底とアップパーを縫い、中底のない、分厚い中敷きを入れただけという当時の日本にはどこにもない靴でした。最初は問屋から価格が高いと言われ、どこも扱ってくれませんでした。

しかし、絶対に売れるという自信がありましたので、小売店2000店に案内状を送り、100店ほどの取引が始まりました。お問い合わせ頂いたお客さんからの反応は大変良く、今日に至っています。現在も当社の主力ブランドの一つになっています。

OEMから離れ、カスタムメイドに踏み切る

吉村 今日、御社の顔になっているカスタムメイドはどのような経緯で始められたのでしょうか？

高橋 2000年初めごろ、ある異業種の会社のOEMを手掛けたところ、よく売れていました。しかし、最終的に締めると利益が出ていない。そこで、セメントからステッチダウンへの切り替えを提案しました。その結果、価格もアップし



稲次氏



高橋氏

お互いに利益が出るようになりました。

ところが、その靴が先方のトップの売れ行きになると、急に大幅な値下げを言われ愕然としました。こういう世界では将来はないと考え、思い切って取引を止めました。

そのときに、これまで心に秘めていたことであり、また「ベージック35」の失敗を生かす意味もあって、カスタムメイドの「和創良靴」を始めました。これは、22〜30cmの17サイズ、B〜5Eの8ウイズ、木型3種類をそろえています。また、50のデザインがあり、100種類ほどの素材から自由に組み合わせを選べます。まさに自分だけの1足が作れるのです。

稲次 下請けが主力のときには、量産を追求した経営だったと思います。このシステムは1足1足作るわけですね。

高橋 そうです。靴メーカーとして、数量の呪縛からいかに解放されるかでした。信念を持って、量産と決別しないと定着しません。

お蔭さまで現在の売上げ構成

は「和創良靴」が3割、「STリラックス」が2割で、OEMは5割ほどになりました。ここ2年はOEMの比率は下がっています。もしカスタムメイドをやっていなかったら、弊社は続いていかなかったことでしょう。

靴づくりを学べる魅力で 県外からの採用も可能に

吉村 製造の現場は従業員や職人の高齢化がどこも大きな問題になっています。

私は以前に靴作りをやりたいたいという若い方々とお話したことがあります。彼らは靴づくりに関心がありますが、工場に入るよりも独立して自分ひとりで靴をつくりたいという人が多かったですように思います。

高橋 当社も10年ほど前から高齢化が始まっています。地元のハローワークで求人しても、誰も来ません。それで、ホームページに「働きながら、夜の空いた時間に靴づくりの勉強ができます」と書いたら大きな反響がありました。

夜間に工場を開放し機械や材料



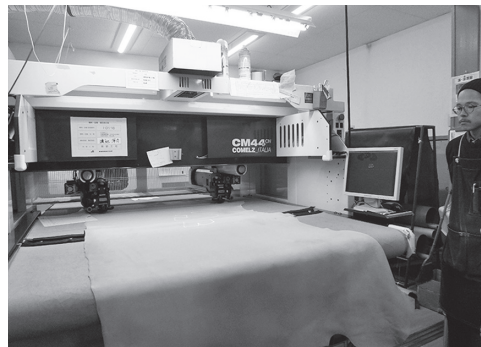
世界で1足の靴が工場で作られる

を使えるようにしたのでです。これまでに30人以上の若い人が働き、現在も10数名の若者が県外から来て、働きながら靴づくりを勉強しています。

当初は「彼らは我が社の技術を盗んで、いずれ出ていく。そんな連中に技術を教えてどうするの？」と反対する幹部もいました。しかし、「地元の若い人が集まらない中で、たとえ2年間でも働いてくれます。それに、彼らが地元に戻って手づくりの靴やカスタムメイドの靴屋を始めたら、我が社の支店ができることになるよ」と説得してきました。実際にそうなっています。



「和創良靴」。靴にはそれぞれ社員の名前が1文字つけられている



最新のCAD-CAM裁断機を導入する

グッドでライトな靴を 世界に広げていきたい

稲次 最近ではイタリアのミカムなどに出席して海外にも進出されているようですが、反応はいかがですか？

高橋 現在、アメリカ、カナダ、オーストラリア、シンガポール、中国の6カ国で販売しています。

これまで何回も挑戦してきました。ヨーロッパ市場への進出では、この9月にやっとノルウエーのセレクトショップとの間で取引がスタートしました。初めに90足を送り、すでにトータルで200足を超えています。その店は英国の「エドワード・グリーン」などの高級品もよく売りますが、それらと同等のクオリティであるにもかかわらず、弊社の靴の値段はその半分程度であることが評価されています。

稲次 ここでご提案ですが、次にヨーロッパの主要都市に出て行くに当たって、靴の身体検査をされるはいかがでしょう。有害化学物質の基準値を満た

した安心安全な日本エコレザーを使った靴で勝負されてはいかがでしょう。

一つの新しい切り口になるかと思えます。

高橋 認定はタンナーに求めるのですか、それともでき上がった靴を検査するのでしょうか。

稲次 裁断される前の革を検査します。

認定は、タンナーでもメーカーでも受けることができます。

この日本エコレザー基準に適合した「安心・安全な革」というお墨



端材の革で作られたバッグなども販売する

付きは、環境先進国であるEU市場でのセールスにきつと役立つと思えます。

吉村 現在、世界各国で有害化学物質に対する規制は、どんどん厳しくなっています。

日本皮革産業連合会も日本エコレザーの普及・浸透には本腰で取り組んで行く計画もあります。

高橋 検討してみます。

私が靴作りで大切にしているのは、たかが靴されど靴ということです。たかがと言つと怒られそうですが、靴は眺めるものではなく、履いてなんぼだと思つのです。

世界にいわゆる銘品はいくつかありますが、結局のところ、重要なのは足にフィットし、毎日履かれるグッド(良い靴)でありでライト(正しい履き心地)な靴が一番です。

当社は80名ほどの工場ですが、この規模でカスタムメイドに取り組んでいる靴メーカーは他にないでしょう。

当社のカスタムメイドシューズは、世界で戦える靴だと信じています。